

自分の木の下で

大江健三郎著

この本は、著者の感受性豊かだった子供時代をふり返って、現代の子供にも共通する思いを、優しく論じてゆくといい内容でした。誰もが一度は考える、「なぜ、子供は学校に行かねばならないか」では、障がいを持って生まれた長男光さんをふり返っています。光さんは、特殊学校に入って鳥の鳴き声ばかりを追っていた毎日から、音楽を通じて友を得て、人の作った音楽を心から楽しむ事を学びました。光さんにとっては音楽が自分の心の中にある深く豊かなものを確かめ、他の人に伝え、そして自分が社会につながっていくために、一番役に立つ「言葉」だということ、光さんは学校で学びました。他の科目も、学ぶ過程で自分を理解し、他の人とつながっていく言葉だと。大江氏はあえて「言葉」と表現しています。理解度に関係なく、学校に行くのは、人との関わりを学ぶためだと考えれば、子供たちは重荷から解放されるのではないのでしょうか。将来を担う子供たちにとって、特に隣国との関係を正しく知る事も必要だと強調しています。教科書で、隣国の侵略を教えないのは、おとなの責任と言いつつも、子供たちには、過去のことだと逃げないで、史実と向き合う姿勢を求めています。この他には、著者の読書方法、うわさに流されない正しいものの見方、こどもの自殺等を事例を引いて、一緒に考える手法をとっています。子供向けの本ですが、子供の目線になって読みました。

F・M・

朝日新聞社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞